

加藤智學先生の追憶

稻葉秀賢

元本學教授、講師、加藤智學先生は、昭和三十六年一月十五日、先生が多年に亘つて在任せられた城端別院において、遂に往生の素懷をとげられた。ここに謹んで哀悼の誠を捧げると共に、多難の生涯をただ教學のために盡されたあとを辿つて、その芳徳を偲びたいと思う。

先生は大正十二年に本學の教授となられ、同十五年には専門部長の要職にも就かれ、昭和十六年、北陸大谷學園の専門部長に轉任せられるまで、専ら後學の育成に當られた。既に大正五年に刊行せられた『阿彌陀佛の研究』を始めとして、『龍樹の宗教』『無量壽經の解説』『淨土眞宗の源流』等の著作に見られるように、先生は着實な學問の人であつた。然し、それよりも、先生から受ける感銘は、先生が稱名念佛絶ゆることのない念佛者であると共に、否それだからこそ、烈々たる護法の精神に燃えて、口を開けば、自信教人信報佛恩の念を吐露して止まれないかつたことである。

先生が眞宗大學の研究院を卒業せられたのは明治四十四年、二十九歳であつたが、既に研究院在學中から、浩々洞の同人に加り、浩々洞編の『佛教辭典』の刊行に力を竭し、先生の學問的活動が始まつている。この頃、清澤滿之先生を中心とする精

神主義の運動は、雑誌「精神界」を中心として、當時の思想界に大きな反響を呼んでいたのであつたが、先生はこうした浩々洞同人の中心として、教學の活動に挺身せられたのであつた。殊に東京九段の佛教俱樂部に於て日曜講演を行い、その因縁で東京駐在に命ぜられ、それ以後長く先生の東京に於ける教化活動が續けられ、多大の成果を擧げられた。こうして若くして教化の事業に當られた先生は、内に熱烈な念佛者としての信念に燃えていられたからこそ、その成果が擧つたのであつて、誠に先生は學の人であると共に、それ以上に得難い教化の人であつたのである。

かくて大正十年、侍董寮の寮司として京都に歸られ、昭和十八年、横濱別院輪番に赴任せられる迄、約二十年間は、先に述べたように大谷大學教授として、専ら學問的活動の時期であつたが、自信教人信の信念の篤い先生は、遂に學校の教壇を捨て、横濱別院の輪番として實際の教化に當られたのである。しかも不幸にして横濱別院は戦火の爲に焼失、その間の勞苦は大邊なものであつた。そして昭和二十一年城端別院輪番に轉任せられ、以後は専ら北陸の地に法雨をそそいで、北陸大谷學園長としての活動のほか、崇徳婦人會、善徳青年會の育成など、先生ならではの教化の實を擧げられたのであつた。

先生の御葬儀には、その芳徳を慕う人々が群參せられたとのことであつたが、まことに先生の遺徳の然らしめる所であつて、先生の名は長く北陸の地に語り傳えられることであらう。